メッセージアウトライン
マタイの福音書1：1～17
「イエス・キリストの系図」

マタイの福音書の特徴は旧約聖書よりの引用が多い。マタイは旧約の預言の成就としてのイエスの生涯を記すことを目的としている。これはユダヤ人がユダヤ人に向けて書いていることの証拠。

[1]「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図」

このことばでマタイの福音書は始まっている。明治、大正、昭和の初めにかけて活躍したキリスト教思想家、文学者、伝道者、聖書学者で日本に大きな影響を与えた内村鑑三は次のように言っている。「論語、法華経、阿弥陀仏、太平記、みな相応の美辞をもって始まる。しかるにひとり新約聖書はアブラハムの子にしてダビデの子なるイエス・キリストの系図と言いて、発音しがたき人名の羅列をもって始まる。不愛想もまたはなはだしからずやである」

しかし、系図が最初にあるのはユダヤ人が伝記を書くときにはごく自然で大切なことであった。天地万物の創造主である神はすでにアブラハムの末から、ダビデの子孫の中から救い主を起こすと約束しておられた。それゆえ彼らの子孫も忠実に、千年も二千年も系図を書き続けてきたのである。それゆえこの1章1節のことばは、この福音書全体に響き渡る宣言といってもよいであろう。このマタイの福音書は何にもましてイエスをダビデ王家の血統の神の約束の救い主、イスラエル民族の祖先アブラハムの子孫の中から起こされるメシヤ（救い主）として描こうとしているからである。

また、知っておかなければならないことは、この系図には省略があるということである。たとえば8節のヨラムの後にはアハズヤ、ヨアシュ、アマツヤが省かれ、11節のヨシヤとエコンヤの間でエホヤキムという名が省かれている。→Ⅱ列王8:16~14:21、22:1~24章、Ⅰ歴代3:15~16

なぜマタイは17節に書いているように区切りが14代ずつ揃うようにしたのだろうか。→2~6節、7~11節、12~16節。　神が天地創造をされたとき、神は第七日に、なさっていたすべてのわざを完成し、第七日に、なさっていたすべてのわざをやめられ、この日を聖なるものとされた。→創世記2:1~3　聖書では七日が完全な一巡りの時間であり、七という数は完全を意味する象徴的な数とされてきた。十四はその七の二倍で、全く完全ということを意味する。つまりマタイはアブラハムからダビ

デまでが一つの完全な期間であり、ダビデからバビロン捕囚までがまた完全な一期間であり、バビロンへ移されたときからキリストまでが、もう一つの完結した期間であると言いたかったのである。
「わたしは、あなたをますます子孫に富ませ、あなたをいくつもの国民とする。王たちが、あなたから出てくるだろう。わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に、代々にわたる永遠の契約として立てる。わたしは、あなたの神、あなたの後の子孫の神となる」創世記17:6~7
　神がアブラハムに祝福の契約を与えられてから、ダビデ王に至るまで、神の約束は着々と上昇線をたどっている。しかし、ダビデ王以後は救い主が現れるどころか、歴代の王たちはほとんどが神に背く悪王で、最後には強制的にバビロン捕囚となって、その王位はくつがえされてしまう。神の祝福と救いのグラフは下降の一途をたどり、ついに消え去ったかに見える。
そしてバビロン捕囚から七十年がたち、バビロンに代わって当時の世界を支配していたペルシャの王キュロスの宣言によってイスラエル人たちは解放され、自分たちの国へ帰り、神の宮を建てることが許される。→Ⅱ歴代36:22~23
　しかし、帰国してからもイスラエル人は多くの困難を通らなければならず、12節に記されているゼルバベル以下のダビデの家系は、旧約聖書も記録していないほどであり、最後のヨセフに至っては貧しい大工の身となっていた。神の祝福と救いの約束はもうどこかへ行ってしまったように思われる。しかし、そこへ「キリストと呼ばれるイエス」救い主が生まれられたというのである。→16節
　主なる神は最初、恵みのうちにアブラハムを選ばれ、彼を大いなる国民とし、あなたの後の子孫の神となると約束された。そしてこの約束を長い年月を通して成就されていった。しかし、主はまた、人間的な目で見れば下落の一途をたどって、世間的には全く忘れさられた存在となっていたダビデの末の中から、救い主を生まれさせてくださったのである。
　ここに歴史を支配しておられる全知全能の神が、歴史の浮き沈みに関わりなく、みこころを実現する誠意と力をお持ちであることが、救い主に至る系図をたどることによって知ることができるのである。この世の評価や人間的な判断とは違って、約束に忠実な神のまことが示されている。イエスはこのような神の力と恵みの現われとして世に来られたのである。→ヨハネ1:9, 14
　この系図から教えられるもう一つのことは、系図に四人の女性たちの名があげら

れているという点である。普通、ユダヤの系図では女性の名は記されない。しかし、ここではタマル(3)、ラハブ(5)、ルツ(5)、ウリヤの妻(6)[バテ・シェバⅡサム11:3]と名があげられている。
タマルは父ユダと関係して、ペレツとゼラフを生んだ。ラハブはエリコの町の遊女でカナン人であった。ルツはモアブ人の女性であった。ウリヤの妻バテ・シェバはダビデが神の前に罪を犯して、夫ウリヤを戦死させて、奪った女性であった。それでこの系図から分かることは血統からいえば純粋ではなく、霊的には不信仰と邪悪で名の売れた王たちの名前に満ちているのである。
しかし、イエスは血統が良いから、毛並みがよいから、先祖が立派だったからそこに生まれられたのではない。主なる神が約束に忠実であられたから、神が歴史を支配しておられるから、神が罪人をも用い、悪人をも御手の中に握っておられるからこそ与えられた救い主であったのである。これは運命の偶然というものではない。人間の系図とその歴史が汚れに汚れ、堕落に堕落を重ねたその果てにご自身の約束を成就されたのである。
このイエス・キリストの系図は決して無味乾燥な人名の羅列ではない。神の前に歩んだ人々の歴史を含むものである。
　自分の家に絶望したり、不名誉や汚れで染まった血筋、家柄、家系に打ちのめされている人、自分の力や努力ではどうにもならない重荷に打ちひしがれている人、生きがいを見失っている人。
あるいはいろいろな罪や汚れのために名乗り出るのも恥ずかしいと思っている人。
福音が、良き訪れが、ここにある。神の恵みとまこと、救いの約束は変わっていない。そしてそのような罪に染まり、汚れ果てた私たちのためにイエス・キリストはこの世に来られたのである。
→マラキ3：1，4：5～6、ヨハネ1：6～17、ローマ3：23～25

〈ダビデ王以後の南ユダ王国の王〉冒頭の即位年は聖書辞典による。

BC965　ソロモン…父ダビデの後を継いで神殿を建設し、国は繁栄するが、晩年は諸国から娶った多くの妻たちの影響で偶像礼拝に陥る。

BC933　レハブアム　この時、北イスラエルの諸族はレハブアムの課した重税に反逆し、ヤロブアムを王として立て、王国は分裂する。以後、南部はユダ王国、北部はイスラエル王国となる。

BC916　アビヤム

BC913　アサ

BC873　ヨシャファテ

BC849　ヨラム

BC842　アハズヤ

BC842　アタルヤ…アハズヤの母。アハズヤ戦死の後、王の一族全員を殺して王となる。

BC836　ヨアシュ…ただ一人逃れたアハズヤの子

BC797　アマツヤ

BC779　アザルヤ（ウジヤⅡ歴26：1）

BC740　ヨタム

BC736　アハズ

BC727　ヒゼキヤ…彼は、すべて父祖ダビデが行ったとおりに、主の目にかなうことを行った。Ⅱ列18：3　　（BC721北イスラエル王国滅亡　Ⅱ列王17章）

BC698　マナセ…悪王

BC643　アモン…悪王

BC640　ヨシヤ…善王　彼は主の目にかなうことを行い、父祖ダビデのすべての道に歩み、右にも左にもそれなかった。Ⅱ列22：2

BC609　エホアハズ　エジプトのファラオ・ネコに捕らえられ、エジプトに行き、そこで死んだ。Ⅱ列23；34

BC609　エホヤキム…悪王

BC597　エホヤキン（エコンヤⅠ歴3：16）…バビロンの王ネブカドネツァルによりバビロン捕囚となる。Ⅱ列24：12

BC597　ゼデキヤ…優柔不断な悪王。ネブカドネツァルに反逆したため、捕えられ、息子たちは殺され、目をつぶされ、バビロンへ連れられて行く。Ⅱ列王25：1~ 7
BC586　エルサレムの滅亡　民のバビロン捕囚　Ⅱ列王25：8～12

BC538　ペルシアのキュロス王の宣言
BC536　ゼルバベルの下での帰還
BC520　神殿の再建
BC400　旧約の最後の預言者マラキによる救い主が来られることの預言→マラキ書

旧約のマラキ書以降、新約の時代まで約400年の空白がある。その間はどのような時代であったのか。

バビロンの王ネブカドネツァルはBC586年イスラエルを滅ぼし、その民を捕囚としてバビロンに連れて行った。その後、BC540年、バビロンはペルシアによって滅ぼされ、ペルシア帝国の時代となった。イスラエルの民は70年の捕囚期間の後、時のキュロス王の宣言でイスラエルの地に帰って神の宮を建てることを許される(Ⅱ歴代36：22~ 23)。しかし、神の宮を建てることはできても、外敵の妨害や無気力、不信仰などによって、かつてのような繁栄の時代は来ず、民は失意のうちに歩んでいた。
ペルシアはその後、BC327年マケドニア（ギリシャ）のアレクサンドロス（アレキサンダー）大王によって征服され、マケドニアの時代となる。アレクサンドロスはインドにまで進出した。しかし、彼はBC323年バビロンにおいて熱病のため死ぬ。その後、彼の帝国はシリア、エジプト、マケドニアと三つの領土に分かれる。
その後、ローマが東地中海に進出し、BC146年、マケドニアはローマの属州となる。
BC63年シリアも戦いに敗れ、ローマに帰属する。BC30年エジプトもローマの属州となる。
かくして、ローマの地中海統一が完成する。BC27年アウグストがローマ

皇帝となり、ローマ帝国の帝政が始まる。ローマの支配により、世界の平和がもたらされ、すべての道がローマに続くと言われるほど、移動のための交通が発達したその時代に、神の約束されたアブラハムの子、ダビデの子としての救い主がこの世に来られることになるのである。そして発達した交通網を通して救いの福音が全世界に伝えられることになる。